
最弱な魔法使い

トウクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱な魔法使い

【Nコード】

N6199Y

【作者名】

トウクロウ

【あらすじ】

魔法使いの名門に生まれたにも関わらず魔法が使えない。そんな少女の物語

決別と出会い（前書き）

新連載です。

二つが連載ものなんて……いけるか？

大丈夫だ。問題ない。

決別と出会い

あれは、確か8歳になった次の日だったと思う。詳しい日は覚えていないが、深夜だったはずだ。

私は、姫島家当主の肩書を持つ父——ひめじま 姫島 げんかく 弦鶴に呼び出されていた。

父は日頃から険しい表情をしていたが、今はその顔に深い皺を刻ませ、さらに。

「どうだ。魔法は使えるようになったか」

外見に伴う威厳のある低い声で、父は私に言葉を投げてきた。

—— 姫島家。

優秀な魔法使いを数多く輩出し、先の戦争では常に前線で戦果を挙げている。国を支える十二家の一角であり、名門中の名門だ。

「い、いえ。まだ初級魔法も使えていません……」

私は父の鋭い視線に挫けそうになりながらも、ただ結果だけを述べる。

そう、私は魔法を使えなかった。

名門の家に産まれて、この事実は笑い話にもならない。魔法使いの性能は遺伝的なもので、優秀な魔法使いの子供ならば優秀でなけ

ればならない。この家にとって私は異常だった。兄や姉、弟や妹も魔法は使えるし、双子の妹も魔法を軽々と使える。いずれも才能を開花させていた。

私はと言うと、魔法が使えないために家に閉じ込められていた。朝起きた時から魔法を扱うための勉強、訓練をして、それで一日が終わる。物心ついた時からその生活だったので、外の世界の事など書物で集めた知識しか知らない。

私の言葉を聞いていた父は、その表情を失望の色に変えていった。

「……そうか。なら、この家を出ていかなければならない」

「……はい」

8歳までに魔法を使えないようであれば家を出る。私が6歳の時、父から告げられた言葉だった。

一般家庭ならまだしも、名門に産まれてこの様だ。私の存在を世間が認知すれば、叩かれるのは目に見えている。そうなれば、姫島家の立場は危うくなるだろう。十二家は実力が伴う家を選ばれるので、その地位を狙っている者も少なくない。そういう者は十二家の落ち度を探そうと躍起になっている。

「お前は、昔から頭だけは良かったからな。理解してくれと思うていたぞ」

父の言うとおり理解はしていた。父は軽蔑の視線をこちらに向けしており、厄介払いをしたいことは。

「さあ、この家から出て行け。金は渡しておこう」

お札が入っているのだろう。封筒を懐から出した父は、私にも触れるのも汚らわしいように封筒を投げる。魔法を使っているのか、その封筒は私の足元に落ちた。それを手に取って深く頭を下げる。

「……今まで、お世話になりました」

別に、悲しいとか辛いなどの感情はなかった。この家には私の居場所はなかったのだから、逆に少しすっきりした気分だ。

父はすでに私に興味はないのか、早々と部屋を出て行った。

私はこの家を出ていくとしよう。

裏口から外に出て、当てもなく歩き続ける。持っているのはお金だけだ。姫島家と知られてはいけないので、何かを持っていくのは禁止された。裏口から出たのも目立たないためだ。

雪が降っており、アスファルトの上に積もっていた。歩くたびにシャリと音が鳴り、靴の中を冷たくしていく。

高級住宅街を抜けて街に出た。人通りは少ないが、それでもこの時間では多いほうだろう。カップルと酔った大人をぽつぽつと見かける。比較的明るく、いくつかの店は営業中だとわかった。

そこで何か買えば良かったのだろう。しかし、どの店に入れば良いか分からなかったし、そもそもお金を使い方さえ知らなかった。

フラフラと体を動かしながら歩き続ける。すでに体力は限界だった。8歳が過ぎすには気温が低すぎる。疲れと寒さにより思考判断は鈍り、自覚はなかったが家を追い出されたことにより、精神的にも疲弊をしていた。

自分がどこを歩いているのかも分からないし、足を動かしているのかも認識できない。焦点が合わず、目の前に何があるのかもわからない。

私は何もわからない。

微弱な衝撃と共に、肌を刺すような冷気を感じた。そうしてやっと視界が戻ってくる。どうやら私は倒れたらしい。

瞳に映ったのは少し汚れた雪だった。その雪が口に入ってくるが、それを吐き出す気力も残っていない。

もう、死ぬのかな。

漠然とそう思った。怖くはない。いや、恐怖を感じないほどに疲れていた。

急激な眠気が体を襲い、私は本能に従うように瞼を閉じようとす

る。

——その時だった。

「ほう、日本でもこのような光景を目にすると、この国も腐ったものだ」

凜とした声が鼓膜を震わした。声の主はどうやら私のすぐ傍にいるみたいだが、生憎眼球が動いてくれない。だが、瞼は再びゆくりと開いていく。

「ガキ、貴様は運が良い。この私に拾われるのだから。感謝しろよ。ちなみ、私がこんな善意を出すのは機嫌が良い時だけだ。よく覚えておけ」

冷たくて鉛みたいに重かった体が、ふわりと浮いた。持ち上げたのだろう。お姫様抱っこされたと気付いたのは、もう少し後になつてからだ。

そして、“彼女”は私の顔を覗き込んできた。その顔は美しく、猫のように細い目が良く似合う。瞳は左右が違う色で、右が琥珀色、左が赤銅色だ。艶のある白銀の髪が私の顔にかかる。

「私の名前は黒沼格だ。^{くろぬまいたる}ガキ、貴様の名前を聞こう」

それが私——^{かなで}姫島奏と“彼女”との出会いだった。

決別と出会い（後書き）

小説を一人でも多くの人に読んでもらえたら嬉しいです。
感想や誤字の指摘などもよろしくお願いします。

きっかけと結果（前書き）

文章がしょぼい……。

他のユーザさんみたいに上手に書きたいです。

きっかけと結果

この世界に魔法の存在が確認されて、すでに100年以上が過ぎた。

きっかけは、世界各国で起こった現象からだ。ある日、世界中に黒いオーロラが同じタイミングで発生した。その漆黒にも勝る色は太陽や月の明かりを遮り、この青い惑星を闇に変えた。人々は「世界の終焉だ！」と叫んだ。まあ気持ちは分かる。しかし、オーロラは数分後には消滅し、世界は元の色彩を取り戻す。この事実は数時間で世界に伝わり、学者や宗教などの様々な人が自論を唱えていた。今考えると少し滑稽だ。

数日後、今度は原因不明の発熱が世界中に広がった。政府は黒いオーロラと発熱は関連性があるとして調査を始めるが、手がかりの尻尾も掴めない。とりあえず、患者を隔離する方法しか思いつかなかったようだ。感染する病気の可能性もあったからだろう。だが、その努力は実ることはなく、世界の9割の人が発熱の症状を訴えた。交通や生活ライン、流通などが停止し、このままでは大規模な死者が出る可能性が浮上する。

さらに数日経ったある日、意外な展開となった。今まで発熱で寝込んでいた者が、一気に回復に向かったのだ。不思議な能力に目覚めて……。

ある者は指先から火を出し、ある者は何もない空間から水を作り出した。個人差はあるが、発熱した者は何らかの能力に目覚めていたのだ。本人たち曰く、「何となく出来る気がした」と言う。魔法の始まりだ。世界中の人々がタネも仕掛けもない超常現象を起こして

いたので、魔法の存在は爆発的に世間に広まる。しかし、新しい技術は悪用されるのが世の常。

魔法が認識されて数週間後、世界は戦火に包まれていた。魔法を軍事に取り込んだ国々が他国に侵略を開始。第3次世界大戦が勃発したのだ。各国も急いで魔法中心の部隊を構成、迎撃をするための態勢を整えた。

戦争と同時に、様々な国が魔法の研究を行う。いくら便利な力と言っても、その存在は不安定なものだ。原理は？発生条件は？

研究の過程で解明されたのは以下の通り。

- 1・魔法を使える者と使えない者がおり、発熱がきっかけで魔法が使えるようになるらしい。
- 2・魔法を使える者には魔力が宿り、魔力を媒体として魔法を使える。この魔力の容量には個人差がある。原則的に、魔力を多く消費すると魔法の威力は比例することが確認された。
- 3・魔力の最大容量は訓練しても増加することはない。が、減少することもない。
- 4・ファンタジーに良くある詠唱はない。しかし、魔法はイメージによって攻撃力、構成スピードが上がるので、各自イメージしやすい詠唱で魔法を使うことが望ましい。

など、大まかに言ってこんな具合だろう。早い話が才能によって大きく左右されると言うことだ。

20年続いた大戦は、アメリカを中心とした国連軍が勝利を収める。

日本国は国連軍に所属しており、最前線で活躍したのを評価された。その活躍を支えたのが十二家だ。日本国はその後の国際社会で有利な地位を築く。

「学校？」

長い黒髪を首の後ろで纏めた少女が、疑問符を浮かべながら振り向いた。

少女は左目に髪と同じ色の眼帯を付けており、右目の瞳も漆黒と言って良いほど染まっている。顔のパーツがバランスよく配置されており、美少女と言っても過言ではない。しかし、凛と上がった目尻が目付きを悪くしており、170センチの身長も相成って少し威圧感を感じる。一言で表すと「クールな美少女」だ。

その少女の視線の先には、木で作られた椅子に座っている絶世の美女がいた。

オッドアイの瞳が少女をじっと見つめる。プラチナブロンドの髪が窓から入ってきた朝日を反射し、まるで美女の周りを天使が踊っているようだ。色気がある顔の造詣は同性でも見とれてしまい、グラマーな体格は男達の視線を釘付けにするだろう。

黒沼格。

数年前の冬。死にかけた少女を拾い、以後ずっと面倒を見てきた女性だ。

格はそのふつくらと唇を妖艶に動かす。

「ああ。ちなみに、もう手続きはしておいてある」

女性に耐性のない男性ならば、その艶やかな声だけで腰が砕けてしまっただろう。ただし、口調は女性らしいとは言えないが。

「また事後報告……」

「そう言っな。私の性格は知っているだろう？」

げんなりとする少女——黒沼奏を見て、格はくつくつと妖しく笑った。

「……うん」

ため息混じりに頷いた奏は、テーブルの上に出来上がった料理を乗せていく。

「おお、今日の朝食はスクランブルエッグか。グッジョブだ！ーさすが私の“娘”だな」

「“母さん”が生活力ゼロの性格破綻者だからね」

「くっ、言っようになったなあ」

「母さんの娘ですから」

取り留めのない話をしながら、奏は格の向かい側の椅子に座る。

「拾ったときは従順で可愛かったのにな」

「はいはい。さっ、食べるよ」

中々ひどい扱い方だったが、格はそれなんとも思っていないのか、二人で「いただきますーす」と言って箸を手を取った。

「で、話の続き何だけど」

「ん？……………ごくん。ああ、学校の件か。ちゃんと理由はある」

白ご飯を口に含んでいた格は、たっぷりと時間をかけて飲み込む。

「聞いて驚け！貴様の入学する学校は、何と世界最高峰の教師、生徒、設備がある“皇総合魔法学園”だ」

「……………は？」

ニタリと笑う母とは対照的に、娘はスクランブルエッグを食べようと口を開けた状態で固まった。

きつかけと結果（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
もう感動しました。

感想・誤字などの指摘をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199y/>

最弱な魔法使い

2011年11月20日05時41分発行